

## 論文の内容の要旨

氏名：川嶋 勝

博士の専攻分野の名称：博士（工学）

論文題名：近代日本における建築出版活動の史的展開に関する研究

——昭和戦前期までの建築出版組織の形成と建築図書の役割

本論文は、近代日本における建築出版活動の史的展開について、昭和戦前期までの建築出版組織の形成とそれに連動した建築図書の役割に焦点をあてながら分析することで、建築出版活動の全体像を検証し、その日本近代建築史上における意義を明らかにすることを目的としたものである。

建築を伝える情報媒体としての書物の存在は、古代ローマの建築理論書から近代建築運動の機関誌に至るまで、建築文化の発展に大きな役割を果たしてきた。とくに近代以降における写真印刷技術の発達、建築の視覚情報の機能を飛躍的に拡大させ、建築を知る機会が実物を見るよりも、書物に掲載された写真を通じた場合となる機会が増大した。

書物は一般に、雑誌と図書に分類され、図書は単行本とシリーズ形式の叢書に区分できる。日本の近代建築史研究において建築の書物（以下、建築書）を対象とした既往研究では、モダニズムの導入をめぐる建築の雑誌（以下、建築誌）の動向を中心に論じられてきた。しかし、建築誌の系譜を描いた建築ジャーナリズム史は、特定の建築誌と建築運動との関係性のみが強調される傾向にあった。一方で、建築の図書（以下、建築図書）の重要性も早くから指摘され、建築技術書や住宅関連書など、研究テーマに応じた個別の考察は行われてきた。近年では、戦前期の主要建築書の復刻刊行が建築誌から建築意匠関連の建築図書へと広がりもみせている。だが、これらの一連の既往研究では、建築誌と建築図書をあわせた近代日本の建築書全体を俯瞰しうる広がりには認められない。とくに、建築図書の系譜を概観する建築史研究上の方法論は提示されてこなかった。

本論文の研究対象は、幕末の開国から昭和戦前期までに刊行された近代建築書である。近代建築書とは、近代西洋文明と接して建設されるようになった近代建築を主題として扱う雑誌および図書とし、日本の伝統的建築を扱う書物については写真印刷などの近代的な刊行手法や解釈が認められるものを含めている。研究方法としては、近代建築書を主体的かつ継続的に刊行した建築出版組織を直接の分析対象とすることで、著者や編集者・出版人による建築書刊行という営為を建築出版組織の枠組みで捉える、建築出版活動という評価軸を設定した。とくに、編集者や出版人という建築情報の供給側の活動を中心に検証している。この評価軸は、つぎのような方法論上の有効性を備えている。

- ① 建築誌のような系譜が見出されてこなかった建築図書に対し、建築出版組織の枠組みにおける建築図書相互の関係性および編集者・出版人の刊行趣旨と刊行手法を分析することで、建築図書の史的展開を検証しうること。
- ② 建築誌および建築図書を一定期間刊行した建築出版組織の諸活動を編年的に捉えることで、建築誌と建築図書をあわせた近代建築書の全体像を検証しうること。

以上の視点に基づき本論文では、建築出版活動からみた建築の近代化過程の検討という日本近代建築史研究の新しい方法論を提示した。

本論文は、序章と結章を含む全6章より構成される。第1章において近代日本の建築出版活動の史的概観について検証し、なかでも特徴的な活動形態を示す3つの建築出版組織に着目することで、第2章から第4章における個別研究の対象とした。

序章では、本研究の目的、既往研究の検討、研究方法とその企図について述べた。そのうえで、日本の近代建築書の研究における建築出版組織と建築図書の重要性という本論の骨格となる枠組みを明らかにした。

第1章では、建築出版組織をその性格によって4類型に区分し、それぞれの成立過程を分析することで、近代日本の建築出版活動の史的概観を試みた。その前史段階として、幕末・明治初期において軍事機関などがオランダの軍事技術書を邦訳した西洋建築技術の導入についても検討をくわえ、邦訳

文や版元の継承性に言及した。

4 類型のうち第一の建築出版組織となる建築系の学会および協会については、造家学会の会誌『建築雑誌』の創刊にはじまり、その草創期は中村達太郎ら有意の建築家の献身的な執筆・編集活動として成立していた。同時期に刊行が開始された建築家の講義録などの建築図書は、著者による自費出版から出版社による刊行へと移行していくなかで、第二の建築出版組織となる建築図書出版社が生まれた。その嚆矢が建築書院であった。建築系の出版社の活動は、図書を主体として幕を開けたのである。

第三の建築出版組織となる建築誌出版社については、社会性の高い建築批評が1910年前後から観察でき、1920年代の建築運動における批評活動をさきがけていた。第四の建築出版組織としての建築運動体では、分離派建築会の活動にみられるように、岩波書店などの著名な出版社から大判の作品集を刊行することで、建築運動の社会的地位の向上がめざされていた。さらに、建築運動と建築誌の停滞期とされてきた1930年代以降も建築図書出版社の創業はつづき、戦後に活発化する建築評論集の刊行の基盤が戦時下において形成されていた。

以上の建築出版組織では多くの場合、建築図集が刊行されていたことを共通点として指摘できる。そこで、建築出版組織の諸活動全体の要点をふまえながら、建築図集の継続的な刊行が認められる3つの建築図書出版社に着目した。建築書院と洪洋社の活動期間をあわせると、本論文の対象とする建築出版組織の諸活動の全期間に相当する。構成社書房の活動は短期間に限定されるが、建築運動の性質を示しながら建築図書と建築誌を刊行していたため、建築図書と建築誌、そして建築運動との関係性を検証しうる。

以降の各章では、この3社の建築出版活動の詳細を検証した。

第2章で扱う建築書院は、建築系の出版社の嚆矢である。同社は、工手学校造家学科の草創期に学んだ吉原米次郎が同校教員から講義録の刊行を依頼されたことにはじまり、土木、建築、機械、電気、造船といった幅広い工学分野の図書を時代の要請に応じて刊行した。なかでも吉原が学んだ建築分野の図書に意が注がれ、とくに建築図集に最大の関心が払われた。読者対象は建築の初学者や技術者から施主へ、さらに宅地経営者などの富裕層へと次第に移行した。扱われるテーマも皇室や華族を含む上流層の住まいの趣味や作法へと重心が置かれるようになり、図面集から写真集へと展開する端緒が確認できた。そこには、わが国の伝統的な住宅のありかたが図集によって視覚化されることで、上流層の趣味や芸術、ときに不動産経営の対象として近代社会に再定着されていく様子が示されている。

第3章で述べる洪洋社は、建築書の刊行点数では戦前期の最大となる。その過半数は、社主・高梨由太郎を中心とした社内編集による叢書形式の建築図集であった。刊行手法としては、洋書からの複製と写真部員の撮影による図版制作が中心となり、やがて洪洋社と社外の研究者との共同実測・撮影による図版表現へと結実していった。そこでは、建築の様式性や装飾性、あるいは伝統性や近代性のありかたが、叢書形式の建築図集を通じて一望の元に図示されていた。多様な図版による視覚的な経験を読者が積み重ねることで、建築意匠に対する美的感覚が養われることが企図されていた。また、施主の趣味や意向を設計者と媒介する役割も意識されていた。多種多彩な建築図集によって造形語彙の選択可能性が拡充されるとともに、拡大する中流層における住文化の趣味を、設計者を通じて建築意匠に反映させる一助となっていたといえる。

第4章で分析対象とした構成社書房は、建築運動の渦中であって建築誌と建築図書の双方を刊行している。『建築時潮』誌では、技術的、理論的な観点から新たな建築概念としてのモダニズムの普及が図られていた。しかし同社の活動全体の主眼は、堀口捨己と岸田日出刀の主導により、建築を中心とした造形芸術各分野および伝統的建築における抽象美の規範を視覚的に提示することにあつた。建設活動の実践においてなお少数にとどまっていた戦前期のモダニズム建築は、大判の写真全集などで欧米の実作品が示されていくことで、世界的な趨勢となることが文化人を中心に広範に伝播されていったのである。わが国のモダニズム建築は、建築運動と建築誌だけでなく、建築図集という刊行形式が採られることで、より広い文化人に対する社会的認知が醸成されることとなり、戦後の建設活動における意識の共通基盤が実質的に準備されていったともいえる。

以上、3社の建築出版活動の考察をへて、つぎの結論をえることができ、結章としてまとめた。

建築書院は、上流層を対象に、伝統的な住宅とその作法を近代社会に再定着させることに貢献した。洪洋社は、中流層を中心に、多様な建築意匠に対する施主と設計者との共通認識を育むことに寄与した。構成社書房は、広く文化人に対し、モダニズム建築の抽象美という新たな造形規範を普及させることに尽力した。写真や図版による視覚表現が発達していくなかで、施主の趣味性が次第に育成され、

建築をめぐる多様な嗜好が醸成されていったと考えられる。建築図書の出版により様式性や装飾性、伝統性、近代性などの西洋より移入された諸概念が相対化され、個人の趣味を媒介に建築意匠を状況に応じて選択できる文化的土壌が形成されていった。

つまり、近代日本における建築出版活動においては、一部の建築家による前衛的な建築誌の刊行にとどまらず、より広範で多様な建築情報を積極的に提供した建築図書が展開されたことで、個人の趣味性と建築の社会性との均衡が図られていったといえる。建築の設計者側だけでなく、施主など建築情報の受容者側の視点も組み込まれていくことにより建築出版活動の裾野も広げられ、近代社会の発展のなかで建築を新たな文化規範として再認識していく契機がもたらされていったのである。